鬼哭（な）く夜
Light ver.

別句通〈bekkutooru〉

薄く色づきはじめた樹木の葉と山間で狭まれた青く澄んだ空が平地より訪れの早い山の晩秋を告げていた。沢の水音は飽きもせずしゃあしゃあと静寂に支配を赦すまいと周りに響き渡っていた。そんな中、山小屋といった出で立ちのかなり古い木造平屋の「瀟泉館」（しょうせんかん）は林道のドンづまりで細々と営まれている一軒宿だ。
狭いロビーに置かれた年季の入った布ソファに二人の男が談笑していた。
「お待ちしてました。トラベルライターの曽根さんだね。……おーい、バアさん、お客さんにお茶」朴訥で律儀そうないかにも杣人（そまびと）といった風の山本孝作はそう話した。年の割に体格が良く気さくな雰囲気もあった。ソファの傍らには客として投宿する曽根敬一のカバンや登山ザックなどの大荷物がある。
山本が老眼鏡をかけ曽根の名刺をまじまじと見ている。受付にいた齢の割に厚化粧の山本桂子はポットの湯を急須に注いだ。
「ごめんねー。気が利かない女将で……ここだけの話、あれ少しぼけ始めちゃいましてね……ま、仕事に支障はありませんがね」
　桂子は聞こえない風を装っているかのように黙々と茶支度をした。
「いえいえ。いいんです」曽根は山本の言をたしなめるようにうなずいた。
こういった山奥の往来が慣れているかのように曽根は道中の疲れも見せなかった。
「お一人ですね？」山本は単独投宿に失望するように念を押して尋ねた。
「すいません。今回カメラマンも同行する予定になってたのですが、都合が悪くなってしまって私一人だけの取材となりまして」
「ま、いいですから。お目当てはウチじゃなくて鬼哭岳なんでしょ？そろそろ山も色づき始めてるし」
「お話ししたように今回は『月刊旅博士』の”手つかずの秘境と山”シリーズということで取材に伺いました」
桂子が曽根と山本に茶を持ってきて差し出し、用は済んだとばかりにすぐに受付の奥に引っ込んでしまった。
「ぜひ大々的にお願いしますよ。今はこの通り夫婦二人でやってんですがね、いずれ温泉が出て有名になれば立派なのをドーンと建てるつもりなんですよ」
「温泉の試掘をされてるのですか？！」曽根が少し意外そうな表情になる。事前の情報になかったのだろう。山本は満面の笑みで顔がくしゃくしゃになった。その顔はまるで幼児が好きなおもちゃを独り占めしているときのようだった。
「せっかく来たなば、ゆっくりしてきぃな。これかんらいい季節だしー」
　よほど機嫌がよくなったか、おくに言葉丸出しのしゃべり方になった。
「はあ。そうしたいのはやまやまなんですけどね」
曽根は山本の話し方の変わりっぷりに多少面喰ってしまった。曽根は湯呑の茶を飲みほしてソファのテーブルに置いた。桂子が再びやってきた。
「お飲みになったらお部屋へどうぞ」桂子は愛想笑いもせず曽根を招いた。曽根は自分の荷物を抱えて奥の客間に歩いて行った。

　途中通ったすべての客室は客の気配がなかった。
（このシーズンでこれじゃしょうがないな）そう思って曽根は苦笑した。しかし静かな旅の好きな曽根にとって悪いことではなかった。
「こちらです。お客さん」桂子はぶっきらぼうにそう案内した。
曽根の案内された客間は建物の一番右端の奥に合った。部屋はざらざらした砂壁の６畳間ほどの広さで、調度品らしいのはちゃぶ台が一つあるだけだった。あかりはランプのものだった。狂おしくも紅い夕日が１枚しかないガラス窓から差し込み、かび臭い部屋の畳の一隅を照らしていた。
曽根が荷物をすっかり下ろし薄いガラス窓に近付く。
「わあー。すばらしい景色だ」窓から峻険な山肌に夕日を浴びた鬼哭岳の勇壮な景色が見える。
曽根はカメラをザックからカメラを取り出し再び窓の際に立ち被写景を物色した。
「お客さん、うちの主人さっき温泉とか言ってたんですけども」桂子がおもむろに話し始めた。
その唐突なしゃべり方は曽根はなぜか少しびっくりさせた。
「は？ああ。温泉出るといいですね」
「いーえ。このへんはまず出ない地層なんですよ。もうそれこそ何十年も何度も何度も試掘して結局だめだったんですよ……その試掘費の借金苦がたたったおかげで主人たら、ときたま現実と妄想がごっちゃになっちゃうんですよ」
「そうなんですか……」曽根は先の主人の調子と桂子の今の話を比較して返答に躊躇した。曽根はカメラを構えて窓の景色を見つめるのが得策と判断した。
正直言って１人にして休ませてもらいたいと思っていた。
「お客さん、明日鬼哭岳に登られるんですって？」
桂子はお構いなしに畳み掛ける。
「ええ。明日は山頂でテント張って一泊してこようと思ってます」
曽根は仕方なく微笑んで応えた。
「こんな忘れられたような山に来られるなんて酔狂ですこと」桂子の指摘はやや図星だった。アプローチの悪いこのあたりの山域は山ブームと言われている今でさえ決して人気があるとは言えなかったからだ。
「仕事ですから……実を言うと出入りの雑誌が廃刊の瀬戸際なんですよ。この企画がつぶれたら僕も仕事無くなるかもしれないんで必死なんです。鬼哭岳も一昔前はそれなりに登られてた名山らしいじゃないですか」曽根は落ちこぼれ生徒の長所を探す熱血教師のような気持ちでそう云

った。
桂子は徐々に思い詰めたような表情になる。窓外は急に夜の帳を下しはじめ、窓外の鬼哭岳の山肌はグレーと群青の絵の具から漆黒のインキに塗り替えられようとしていた。桂子が膝を崩して座り込む。「……お客さんは、あの事はご存じないんですかね？」桂子はまるでしわがれた顔から大きな瞳がこぼれるくらいにうつむいてしゃべった。曽根は思わず唾を飲んでしまった。「何の……事です？」薄い窓ガラスが吹き始めた夜風でガタガタ揺れ始めた。窓の外はすっかり夕日が山の端に隠れ鬼哭岳がシルエットになっていた。

鬼哭岳の全景が映される。山麓から鬱そうとした森がびっしり生え山頂部付近には岩場が見られる。まるで桂子のうらみがましい声が山全体に響き渡るようだった。
「たしかに景色もまずまずだし、以前は登山や季節の山菜やきのこ取りで訪れるお客さんがいましたよ……そして１７～１８年前まで山頂の近くには鬼哭小屋という小さいな山小屋もあったんですよ」山頂部付近の小屋がクローズアップされる。

「瀟泉館」の曽根たちのいる客間はランプもつけず互いの顔がやっと識別できるくらいだった。曽根は表情を変える暇も忘れて聞き入いっていた。
「鬼哭小屋は夏場から秋にかけて男性一人の管理人が常駐してたんです。これがまた糞がつくほど真面目な人でね……それに若い頃は熊と格闘したなんて自慢話もしてたですよ」良くない思い出をほじくるように桂子は話を続ける。

白黒で山頂の小さな鬼哭小屋の全景が映される。周りは岩場でわずかな平坦地に建っている。登山客に声をかける後ろ姿の管理人。夕空から夜空になり小屋の明かりが消える。次々と静止画が変わり続けた。
桂子の声がそれにかぶさるように続く「でもうまくいかないことが続いたらしくて、あるときから奇行が目立つようになっちゃって。そしてついに……」

「瀟泉館」の客間は桂子と曽根を２人にしてすっかり暗く、月明かりが頼りとなっていた。桂子が天井を見つめる。どこからか入ってきた蛾が飛んでいるようだ。ぱたぱたと鱗粉をまきちらすような不快な雰囲気が漂う。桂子はひとり言のように言う。「ついにあんな事件が……」窓ガラスに桂子の顔と曽根の後頭部が映る。窓外に鬼哭岳のシルエットがアップになった。

[redacted]

「瀟泉館」の客間では桂子は一つもまばたきせずに窓外をじっと見つめている。曽根は冷や汗をかいている。そして思い出したようにランプをともした。部屋がニスで染めたような鈍色（にびいろ）の明かりになじむ。
「……ははは？そんな大事件なら有名になったはずじゃないですか？記憶にないなあ」曽根は固唾を飲みつつ半信半疑で耳を凝らしていた。桂子は構わず語り続けた。
「当時の地元代議士が風評の悪化をおそれてもみ消したんですよ……でも」一瞬の沈黙が支配した。桂子が再び話出した。
「焼け跡から管理人の死体は見つからなかった……そいつはこの山のどこかでまだ生きている！」
「……そ、そんな……」曽根は軽く狼狽した。
「一昨年キノコ狩りに山に入って行方不明になった人がいました……でも本当[redacted]です……」桂子は語り始めて初めて曽根の目を見つめた。そのとき部屋の入り口の戸が開き、曽根がびっくりして振り返る。宿の主人の山本が立っている。
「馬鹿野郎！何やってんだ！飯の支度があるだろが！」山本は曽根がいるのも構わず桂子にどなった。桂子は返答するでもなく無反応にうつろな目つきで何かつぶやいていた。山本は桂子をうながして部屋から出させる。
山本が曽根に謝罪した。「どうも、お見苦しいとこ見せちゃってすいません」
山本が桂子を指さして苦笑しつつ頭を下げて立ち去った。曽根も苦笑して会釈する。

「はぁ、いい湯だった」浴衣着姿の曽根がうす明かりの脱衣場を後にしようとした。
（これなら別に温泉じゃなくてもいいんじゃないか）離れの湯屋から出ようとしたところ足元に何か棒のようなものにサンダルのつま先が軽くぶつかった。
[redacted]。瞬間、曽根は意識と思考の回路のスイッチを切るようにして元の姿勢に戻ろうとした。
「お湯どうでした？」暗がりから山本の声がした。曽根ははっ、と気を締めた。
「あ、ええ最高でした」「マキのお風呂もいいもんでしょう」
山本の顔が確認できるほどの明るみに出てきたとき、先ほど見せた無邪気な幼児のような顔を見せた。「はーはっはっはっ……」山本が屈託なく笑う。

曽根は疲れのせいか愛想笑いで返すだけだった。
　昼夜を問わず支配する沢音と夜の闇とが深く溶け合っていった。

凛とした山の早朝、宿の玄関前の周囲はまだ薄暗かった。曽根が本格的な初冬の登山の服装でザックを背負おうとしている。眠たそうな山本が見送りに立っている。
「ゆうべ女房が言ったことは気にせんで下せえ。もう悪い癖でさあ……」
「いえいえ怖い話は僕も好きですよ」曽根はあいさつを交わし出発した。おもむろに旅館を振り返ると１つの部屋の窓から桂子が曽根を無表情でぼんやりと見ていた。曽根は思わず目をそらしてしまう。

日もすっかり高くなった昼下がりの時刻、息を切らして曽根が鬼哭小屋のあった山頂付近の狭い広場にたどり着いた。
「はあはあ……あー着いたー」
さすがに見晴らしが良く周囲の山を見下ろす高さにあり、風雪に耐えるハイマツや咲き残った高山植物の花々がはかなげに生えていた。ザックをおろして平坦な地面を選んで座り込んだ。ザックからボトルを出して水を飲む。よく見ると一角には小屋の基礎があったらしい跡が残っていた。
「山本さんが言うには、客足が減ってきたから取り壊しただけだそうじゃないか」思わず曽根は声に出してそう言った。
曽根はボトルのキャップを閉めておもむろに携帯電話を取り出した。電波受信状態のバーが一本立っている。
（ここは遮るものないから通じるのか）そう思い携帯をかけ始める。
「ああ、編集長……ええやっと現地に着きましたよ……天気も良くてばっちり。いい記事ができそうです。……えーと、だから取材費だけでも早くいただけませんか。……そして昨日おもしろい話を聞きまして……」そう話しながら曽根は背後に伸びてきている崖の影の上にさらに人影が伸びているのに気付いた。曽根が驚き後を振り向いた。崖の上に小さな木が生えているのを見て苦笑する。（なんだ、人影ではなく木の影か）
「なんだ……あ、いえ。なんでもないです。じゃ」携帯を切る。
「ばかばかしい」

夜になった。
曽根は同じ場所にテントを張った。その中から灯りが漏れている。入口から曽根が顔を出した。
「うわっ星がきれいだなー」夜空は満天の星で曽根は思わず顔を上げた。ヘッドライトを頭に巻き付けており、カメラと電子手帳を持って外に出た。眺めのひらけているほうに向かって腰をおろす。眼下の向こうにはかすかに街灯りも見える。
「くそ！取材費立替えはきついな……これが終わったら次の雑誌探したいなあ……」うつむいて一瞬腕時計が目に入った。腕時計のカバーグラスの表面に
燃●●
●
●●●
。曽根が反射的に身を引き決死の形相で急いで振り向いた。しかし闇の中には星空の下、小高い崖と灯りの漏れているテントが見えるだけだった。腕時計を見直すと蛍光の数字が光るいつもの時計盤があるだけだった。
「はぁ……疲れてるのか」ポケットにしまってあった携帯が突然鳴りはじめた。曽根はびくっ、としてあわてて取り出した。画面は『瀟泉館』の文字とその電話番号を表示していた。
（なんなんだろ？）通話に出る。「もしもし」相手は無言だったが心なしか荒い吐息の息遣いが感じられた。曽根は強めの声で早い口調で話した。「もしもし？もしもし？ご主人？！」
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●。
●●●最後まで木霊が山全体に鳴り響いていった。
暗い中俯瞰的にテントを張ってある場所が段々小さくなり鬼哭岳全体が映る。了

鬼哭（な）く夜　Light ver.

http://p.booklog.jp/book/75676

著者：別句通〈bekkutooru〉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/75676

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/75676
*本作品の著作権はGK　CIRCUIT　LIMITEDが保有しております。
*本作品の２次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkcircuit.comか
若しくはhttps://twitter.com/bekkutooru
にツイート等してご一報下さい

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ